

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0793240011		
法人名	社会福祉法人 おおくま福寿会		
事業所名	グループホーム やすらぎの里		
所在地	〒979-1301福島県双葉郡大熊町大字夫沢字南台152番地の2		
自己評価作成日	平成23年1月4日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigo-fukushima.info/fukushima/Top.do">http://www.kaigo-fukushima.info/fukushima/Top.do</a>
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人福島県シルバーサービス振興会		
所在地	福島県福島市中町4番20号みんゆうビル302号室		
訪問調査日	平成23年2月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

和風木造建築の離れ家。一年を通じて四季折々の各種行事や風物詩を取り入れながら、入居後も家族との関わりを保てるよう誕生会や忘年会、日帰りバス旅行等のご案内をしている。今年度の忘年会では、日頃の練習成果を存分に発揮され、ハンドベルの生演奏を披露し招待者より喝采を浴びた。誕生会では、家族から心のこもった贈り物を手渡され、至福のご様子である。平常は、居室担当職員がご家族に代わり、きめ細かな気配りを心掛けている。24時間365日、介護看護スタッフが見守る中で、入居者の笑い声や歌声が響き渡る暮らしを提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

①介護度の低い利用者が多く(要介護1~3)、職員との大声での歌声や会話がリビングに響き「明るい大家族」の雰囲気がある。  
 ②利用者の健康管理に注意が払われている(室内の温・湿度、外出時の感染予防等)と共に、日常の過ごし方にも工夫が凝らされ、事業所独自の学習方法(家族の名前記入シートや読み書き、計算シート等)が記憶力低下防止に繋がっていると考えられる。  
 ③職員の定着率と向上心が高く、介護福祉士等へのチャレンジが行なわれている。またその際、法人は試験時の欠員補充等のバックアップ体制も出来ている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域で老後を送ることができるよう、『職員が代理家族となり、家庭的な雰囲気の中、入居者に安心と潤いのある共同生活を提供する』。また、『その人らしい暮らし』の実現と『地域に開かれた施設』『サービスの質の向上』のため、自己研鑽や仕事に励んでいる。	「家庭的な雰囲気の中、利用者に安心と潤いを提供する」とした理念を全職員で共有し、ケアの実践に努めている。地域密着型サービスがイメージし難い理念となっている。	地域密着型サービスの意義や役割を考慮した理念を作り上げて欲しい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内外を問わず、行事(大熊町ふるさと祭り・芸能発表会)などには積極的に出向いている。また、地元の理容組合がボランティアで定期的に散髪に来てくれる他、地元の学生や社会人等が介護ボランティアで気軽に訪れるなどの交流がある。	利用者全員が、地元出身者である事から、多くの知人・友人の訪問がある。又地域の人の手芸(編み物・裁縫など)の手伝いもある他に、中学・高校・大学の学生の体験実習も受け入れている。町内会の行事へも積極的に参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎年、地元の中高校生を職場体験の場として積極的に受け入れ、将来の職業選択に是非とも役立てて欲しいと考えている。多くの有望な人材が育つのに貢献している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、事業所の取組内容や具体的な改善課題がある場合にはその課題について話し合い、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービス向上に活かしている	運営推進会議で取り上げられた要望や検討項目には、速やかに改善するよう努めている。	事業計画等の運営に関する意見交換を行なう「会議型」、バス旅行やクリスマス会等に参加する「行事参加型」の開催が各々3回行なわれる。メンバーの運営内容の理解の深まりに伴い活発な意見交換が行なわれ、サービスの向上に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に介護保険担当の町職員が参加してくれるため、関係の強化はもちろん、制度上の重要な情報などをいただいている。また居宅介護支援事業所からも新規入居希望者などの情報を得ている。	町職員が運営推進会議のメンバーとして、全会議に出席しており、町担当者との緊密な連携が取られている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現も身体拘束は行われていない。更に職員の意識を高めるため、目に付く場所(事務所内)に、身体拘束11か条を掲示し実践している。	職員は事業所内外の研修を受け、身体拘束が及ぼす弊害を認識している。利用者の不穏時には寄り添いや見守りで対応している。玄関は夜間の防犯目的以外は施錠はしない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待には、様々な種類があることを学んでいる。身体的な虐待はもちろん、暴言などによる精神的なもの、また放置や無視なども決して行ってはいけないと認識し実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度が必要なケースについては、入居検討委員会の場合において話し合われる。しかし、当事業所では、これまで可能な限り家族・親族の方からの支援が得られるよう働きかけているためか、制度の利用に至ったケースはまだない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族等からの入居相談があった際は、パンフレットのみならず個々の介護状態に応じた個別の料金表を作成し、併せて口頭での説明(電話相談受付可)を行なっている。基本的に契約の締結や解約・改正時は、管理者が身元引受人等と面談のうえ説明し、合意締結している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常的な不満や要望などがあれば直に聞けるよう、担当者が身近な存在として日頃より接する機会が多い。また、建物内に意見箱を設けたり、家族の来所時は、個別に管理者や居室担当職員が対応し、意見や要望などを受けやすいようにしている。	日頃から、利用者、家族の意見や要望を聞き、聞き取った意見等は、畑の耕地面積の拡張や種苗の選定、レクリエーション用のジグソーパズルの選定等に反映されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定例で課内会議を開催し職員からの闊達な意見や提案を聞き入れ、早急に対応できるものは対応し、十分な時間が必要なものについては、その旨を伝え了解を得ている。また、タイムリーな確認事項の変更は、申し送りノートを活用し記録としても活字に残し、職員全体で周知している。	管理者と職員の日常的なコミュニケーション、定期開催の全体会議や各種委員会(環境美化・保健衛生・広報等)で出された意見は運営に反映されている。物置の設置やキッチンに取り付けた見守り用の大きな鏡は職員の提案で実現された。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員のスキルアップ(各種資格取得のため、試験日や講習日に休暇を希望した場合など)目的には勤務日を調整(希望公休を認める)している。法人の方針で資格取得者(取得資格にもよるが)については、給与や身分の昇給等がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会の案内を回覧したり、順次研修会への派遣を行ったりしている。また、新人教育マニュアルを基に、先輩介護職員が個々人に応じて独り立ちするまでの間、新人教育にあたり指導助言を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH連絡協議会(年6回定期開催される浜北地区会議)から様々な情報や交流の誘いなどを受ける機会も多く、ネットワークが既に出来上がっている。業務で困っていることなどを他ホームではどのように行っているのか尋ね、参考にさせていただく事も多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の生活暦や家族状況、趣味、性格など様々な情報収集を行い、施設に居心地よく過ごせる居場所を見出す。その上で、安心できる環境設定と共に寄り添う関係であると認知して頂くよう働きかけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に先立ち必ず家族から口頭で説得してもらい、一端は納得された状況で、入居されている。また、家族との関係が絶たれないよう入居後も面会や自宅への外泊等、双方が違和感なく最小限の負担で施設生活に移行できるよう、本人家族と相談しながら進めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談があった際、担当ケアマネジャーより直接情報を得ることで、『その時(入居の時期)』の見極めや入居までのスムーズな連携が取れている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の「思い」を理解・共感し、個性を引き出すよう努めている。入居者と職員と一緒に何かを行う機会も多く、様々な事を学び教わることも多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とは日常生活状況報告以外にも、誕生会・クリスマス忘年会、日帰り旅行には、家族等へ招待状を送り参加を募り、お盆や年末年始等、帰省で家族の集まる時期には、自宅への外出や外泊を支援している。これらの働きかけで家族と本人の思いが結びつくよう尽力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域行事への外出機会を設け、地域に暮らす知人等との継続的な交流ができるよう努めている。交代で食材の買出しに地域のスーパーまで出掛けている。他には、本好きの入居者に対し、週1回は馴染みの本屋まで送迎を援助している。	知人・友人の頻繁な訪問時の支援や、スーパー等の行きつけの商店での買い物等、馴染みの関係が継続出来るよう支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事や余暇活動等の場所(席)には、入居者同士の相性、これまでの生活習慣の違いを考慮し対応している。日常的に職員が潤滑油的役割となり、日々の活動を支援するなか、入居者間でお互いの居室へ行き交う姿も見られてきている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	断ち切らないよう努めている。特に、敷地内の特養へ移行した方については、仲の良かった入居者と共に居室を訪ね談笑したり、通院や買い物で見掛けた時などは近況を尋ねたり、本人や家族と言葉を交わすことは当然のことと自負している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族や近親者をはじめ、居室担当者等から情報を収集したり意見を聞いたり、本人の言動や行動等だけに留まらず、総合的に把握するよう心がけている。	利用者のほとんどが、自分の思いや意向が表現できるが、十分に把握する目的で家族や親近者からも情報を得ている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントについては、一部センター方式を取り入れ、必要な情報を計画作成担当者のみでなく職員全員が収集し、課題解決に向け情報をより多く収集できている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケアプランは、一人ひとり個別的な対応となっているが、食事時間や入浴時間は共通の時間としている。しかし、食事内容は個人の嗜好や体質等を考慮し、代替食や食べやすい形状にして提供している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に本人や家族の意見要望を確認し、課内会議で検討しプランの修正を行う。その際、主として担当職員が現状や意見を述べ、チーム全体で方向性を確認する。また、状態に変化があった場合は、本人等の要望を確認したうえで、ケアマネがケアの修正を行い必ず家族の同意を得る。	利用者、家族の要望を踏まえ、日々の介護記録をもとに全職員でモニタリングを行い、利用者の実情に即した介護計画を作成している。また、状態に変化があった場合には、家族や関係者等で話し合い、随時介護計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	特記として介護記録様式に介護者の気付き(考察)の枠を設け、入居者の行動や言動の変化を具体的に記録するほか、介護者の判断や予測も記入し、全貌を把握できるよう努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	臨機応変に対応できるように心掛けている。例えば入居者の急病時に病院受診の送迎や同行など、遠方や仕事で家族の都合がつかない場合なども事業所に対応するよう調整している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	特に家族(親族)の力添えが大きい。入居時から本人と家族等との関係が継続して良好に保てるよう働きかけている。例えば、本人が面会を心待ちにしている様子を伝えたり、家族や友人宛に手紙や年賀状を書いて出したいという要望に応えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時から通院や突発の病院受診は、基本家族対応で依頼。しかし、緊急時や医療機関との連携を図るため、GH看護師が受診に同行し直接指示を受けたり、同行出来ない場合でも、日々の健康状態を集約し通院時に家族が持参できるよう情報提供に努めている。	利用者のかかりつけ医の受診を支援している。受診は家族対応を基本としており、受診後は家族より結果を報告してもらい、情報を共有している。また、協力医療機関からは往診もあり、適切な医療が受けられる体制となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、昼夜を通して入居者の介護にあたっていることで、利用者の健康状態についての的確に把握し、毎朝の申し送りで見守り(管理者兼務)へ報告している。また、入浴介助の際にも、皮膚状態や打撲痕等の異常も見逃さず、報告指示を得て対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時に主治医からの説明を受ける際は、家族以外の立場として同席する場合がある。その際、特に退院後の生活で予測される事故や注意すべき動作など詳しく指示を受けた事がある。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化やターミナルの対象者は特養での受入態勢がある。しかし、待機者も多く、即入所できる可能性は少ない。施設であっても病院であっても退居後の受入先が決定しない場合には、引き続き経過を見るが、家族等の要望を受け、心身状態の重度化により、いずれは母体施設の特養に移行されるケースが多い。	重度化や終末期の対応は、事業所指針に基づき、契約時に利用者、家族に説明し、同意を得ている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員全員が『普通救命講習』を受講している。また、疾患別に必要な応急処置を内部研修で学び、緊急時に対応できるよう訓練している。実際急変時は、GH看護師(管理者兼務)にオンコールでの連絡体制をとっていることで、個別の指示を仰げるようになっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	開所時より年2回法人事業所と近隣の関係機関とで総合防災避難訓練を実施。今年度は、グループホームと特養との連携体制を重視し、概ね2ヶ月に1度夜間想定同時避難訓練を実施し、防災への意識を高めている。	隣接する法人施設との合同の総合防災訓練を消防署の立ち合いの下、年2回実施している。訓練には近隣の消防団も多数参加している。その他夜間想定避難訓練や防火設備の点検、職員非常召集訓練等2ヶ月に1回実施している。災害時の食料品等は備蓄している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	記録物は鍵付の戸棚に保管し、記載中の記録に関しては綴じ込み式のバインダー使用にて、他者の目にふれない様配慮している。居室の暖簾については、本人のみの目印としてだけではなく他者の目にもふれるようにし、他入居者が間違えて入室しないよう配慮している。	居室へ入る際のノックや利用者への言葉かけ等について、利用者の尊厳を損ねない対応の徹底に努めている。また個人の記録等の管理も適切に行なわれている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を引き出すことが困難な場合もあるが、好みの飲み物を選んでもらう際や活動への参加など、自己決定を促す言葉かけに努めている。一年中セルフサービスのお茶(温・冷)を準備し、それぞれ自由に飲んでもらい、好評を得ている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるものの、その場の状況に応じて、出来るだけ柔軟に対応している。大まかだが予定はたてている。しかし天候により変更される場合もしばしばある。晴天時には外出や戸外での活動で気分転換を図る。個々のペースや余暇時間を尊重している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装は、個人の自己決定に委ね、いつも清潔な物を身につけられるよう注意を払う。また、晴れの日には、職員にメイクやドレスアップをもらいお洒落を楽しんでもらっている。また、通院や外出の際は、よそ行きのおしゃれな服装で出かけられるように家族へ準備などを依頼している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事に関連した作業を利用者とともに職員が行い、一緒に食事を味わいながら利用者にとって食事が楽しいものになるような支援を行っている	農園で入居者等が育てた野菜を使い、入居者の嗜好を考えて調理し食卓へ出している。また、商店街への買い物には入居者が交代で同行し、食材の吟味や好みのおやつ選びなどを手伝ってもらっている。他には調理の下ごしらえや下膳など、入居者に負担にならないよう能力に応じて手伝ってもらっている。	食事の準備や後片付け等は利用者ができることを職員と共に行なっている。職員も利用者と一緒に食卓を囲み、みんなで食事を楽しんでいる。また、利用者が育てた季節感のある食材を使用した時などは会話も多くさらに楽しい食事となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	具体的数値としての把握はしていないが、献立は管理栄養士に確認してもらい、食事の摂取量も記録している。日中は、定時のお茶以外にセルフサービスで麦茶や温かい日替わり茶入りのポットと湯呑みをカウンターに常備している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	定期的に週2回(月・木)、義歯の洗浄を行っている。更に毎食後、洗面所への誘導や声かけを行い食後の歯磨きを習慣付けている。就寝時は、義歯の除去を確認する(夜間は個人の義歯専用ケース内に保管)。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個人の状況に応じて、トイレ誘導や声かけ、紙おむつ・リハビリパンツやパットの使用を適宜行なっている。夜間リハビリパンツや紙おむつを使用する入居者に対し、日中は個別の排泄パターンに合わせてトイレ誘導し、布パンツに変更する等を試みている。結果として紙おむつやリハビリパンツを常時必要としなくなった成功例が多い。	排泄の自立に向けた支援に努めており、リハビリパンツから布パンツになり、布パンツの効用で皮膚のただれ等が改善された例もある。現在、排泄の自立者は約半数に達している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日排泄の記録・確認を行い、排泄コントロールを実施している。出来るだけ下剤等に頼らず、毎日の食事や規則正しい生活習慣によって、自然排便を促すよう努めている。また、それぞれの体力に応じた、散歩や軽い体操、レクで身体を動かすことが習慣となっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	夜間の入浴は緊急時に対応困難となり得るため、日中でも快適な入浴時間となるよう、湯温の調整・入浴剤の使用等個人の要望を取り入れ、週3回実施している。また、汚染時や夏場などは、その限りでない。	毎日入浴できる体制となっているが、週3回の入浴を基本に支援している。畑仕事等で汗をかいたとき等はシャワーでの対応もあり、常に清潔を保てるよう努めている。入浴拒否者には言葉かけ、介助職員、時間等を変えて対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を促し、生活リズムを整えるよう努めている。冬季は全館床暖房となるため夜間でも陽だまりのような温かさを維持している。娯楽室の掘こたつも憩いの場の一つである。夏季は湿度調節して体感温度を下げられるよう各居室にエアコン完備。他には寝具類で調整したり、布団乾燥機を活用し適宜布団干しも行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬早見表を確認に用い、服薬管理は3重チェック(①処方薬を家族から預かり個人の薬ケースに1週間分ずつ分ける作業がGH看護師②翌日の服薬を1日分だけ朝昼夕の与薬ケースに移す作業が夜勤者③与薬直前に本人へ手渡すのが日勤者)で行い、誤薬の完全防止に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	暮らしの中で得意分野を発揮されている。役割や仕事に対して、その都度感謝の言葉を伝え、能力に応じた家事(掃除、洗濯物干し、洗濯たみ、食事の下準備)、カーテン開閉、畑仕事、消防団等での経験を生かして防災訓練時には職員に次ぎ本領を発揮される。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	地域行事や季節のイベントで町内外へと外出の機会を設けている。毎年恒例の日帰りバス旅行の実施(家族や運営推進員も参加)や、外食ショッピングと称して、郡外へも外出している。その他イチゴ狩りや紅葉見学などを楽しんでいる。	季節にもよるが散歩を日課としている。また畑での野菜作りや、庭やベランダでの日光浴等、利用者が自由に戸外で過ごせるよう支援している。買物等も利用者の希望により支援しており、事業所としては外出の機会を多く企画し実践している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人に合わせた所持金の対応をしている。外出時には自分で財布(現金のみ)を管理していただき、自分でお支払いされる方も居る。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	状況に応じた対応ができるよう努めている。電話の利用については、希望があれば子機を利用していただく。また、いつでも家族などへ便りを送れるように、事務所には便箋・封筒・切手を常備している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	第一に清潔を心がけ、季節の花やタペストリー、馴染み深い小物等を飾り季節を演出する。また、冬場は気温も低いことから外出機会が減ってストレスとならないよう、屋内での癒し効果を得るため、数種類の観葉植物等も配置している。また娯楽室(和室)に掘りごたつを準備し、入居者がゆったりくつろげるようにしている。	共有空間は季節の鉢植えや花を飾ったり、季節感のある飾り付けをしている。また、ウグイスや小鳥のさえずりのBGMが流れ、癒しある共有空間となっている。テーブルやソファ、長椅子等は利用者の状態にあわせて配置されており、利用者は思い思いの場所で自由に寛げるようになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間・ホール以外のスペースにも、所々ベンチやテーブル等を置くことで自由に休息がとれるよう試みている。また、各種活動への参加も強制せず本人の意向に任せている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切にし本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている(小規模多機能の場合)宿泊用の部屋について、自宅とのギャップを感じさせない工夫等の取組をしている	家族写真を額縁に入れ、机いっぱい飾ったり、壁の掲示ボードには、自作のカレンダーやその他の作品を所狭しと飾る方も居たり、本人の好みでベッド位置を変え模様替えをしたり、それぞれこだわりの部屋作りを行っている。なかには、地デジテレビやラジオ等の家電を持ち込まれ、ほぼ自宅に居るようにリラックスして過ごされる。また居室入り口に暖簾をかけたいという入居者は、よりプライバシーを確保できるようにと自らの意思で環境作りがされている。	各居室は広く清潔に保たれ、クローゼット、机、椅子、ベッドが備え付けとなっており、ベッド等の位置や向きは利用者の好みで配置している。家具等の持込などには制限がなく、利用者が使い慣れた品を持ち込み、安心して過ごせるよう配慮されている。また、各居室には加湿器が備えられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	歩行器等を自走している方でも安全に、自由意志で移動でき、本人に不自由な思いをさせず満足してもらえるよう整理整頓を心掛けている。和室出入り口に手すりをつけたり、ベッド脇に椅子を置いたりして、安全に身体機能を活かした生活が送れるよう工夫している。		